

はじめに

蹠陀山補陀洛院金剛福寺は四国の最南端、土佐清水市の足摺岬を見下ろす丘の中腹に位置し、弘法大師空海が開創したと伝えられる四国八十八ヶ所霊場第三十八番札所です。また、補陀洛（インドの南部にあるとされる観音菩薩の降臨する観音浄土）東門とされ、観音信仰の霊場として知られています。

金剛福寺では、平成一六年度から平成三一年度にかけて本尊の木造千手観音菩薩立像をはじめ木造二十八部衆立像、風神・雷神像、両脇侍立像の木造不動明王立像・木造毘沙門天立像の解体修理が行われ、本尊等からは胎内銘や經典等の貴重な胎内納入品が発見されました。今回の企画展では、文化財修復の成果の一つとして、両脇侍立像と二十八部衆立像を修理後初めて一般公開します。併せて、南北朝時代の鰐口、室町時代の千手観音立像懸仏や「補陀洛東門」の扁額などを公開し、観音浄土に船出する補陀洛渡海について考え、当時の人々の祈りの世界に迫ります。

また、金剛福寺は札所であることから、四国遍路の納経帳なども取り上げます。さらに、足摺岬の弘法大師御遺跡にも目を向け、史跡や伝承を活用した観光についても考える機会とします。

最後に、今回の企画展の実施にあたって、多大なるご協力をいただきました金剛福寺様、諸機関には深く感謝申し上げます。

令和二年四月二四日

高知県立歴史民俗資料館 館長 福田 道則

凡例

- 1 本冊子は、令和二年四月二四日（金）～六月二八日（日）（六六日間・会期中無休）に高知県立歴史民俗資料館において開催する企画展「補陀洛東門開く 蹠陀山金剛福寺」の関連パンフレットである。
- 2 展示作品は、主要な作品を掲載した。展示していても、本書に掲載していない作品もある。
- 3 掲載順は、本尊脇侍立像、二十八部衆立像、鰐口とした。
- 4 本パンフレットに掲載した写真は、有限会社泉企画、タケムラスタジオ竹村豊氏、当館職員が撮影したものである。
- 5 本パンフレットの構成・執筆は当館副館長 岡本桂典が担当し、巻末に東近伸氏の論考を掲載した。編集にあたり有限会社泉企画泉谷申一氏、竹村豊氏の助言を受けた。

主 催 高知県立歴史民俗資料館（公益財団法人 高知県文化財団）

特別協力 宗教法人金剛福寺、国立文化財機構文化財活用

センター、東京国立博物館、有限会社泉企画

後 援 高知県教育委員会、高知新聞社、NHK高知放

送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSS高知さんさんテレビ、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知

美術文化振興基金助成事業

靈地―蹉跎山金剛福寺

蹉跎山金剛福寺は、四国の最南端、足摺岬を見下ろす中腹にある。足摺岬は、足摺半島の最南端に位置し、蹉跎岬、足摺岬と呼称されている。足摺半島の地形は、山地と海岸段丘に特徴があり、山地の緑のある地域に海岸段丘が発達し、この段丘が直接海に接している。岬は花崗岩の隆起海岸で、海岸段丘の下端が広く発達し、そこにそり立つ断崖は、自然の厳しさを見せつけている。享祿五年（一五三二）に土佐に下向した住持尊海の手による『蹉跎山縁起』には、金剛福寺の景観について、「過去遠々仏跡、菩薩説法の浄場なり、仰て地形の勝絶を見るに、後は大悲の山峨々とそびへ」と書かれている。岬にある断崖には、海に落ちる瀧があり、瀧には弘法大師信仰にかかわる名称がついている。この瀧は、江戸時代の絵図にも描かれており、その存在が知られ信仰されていたことが考えられる。このように靈地として位置づけられるには、その要因の一つとして自然地形が深く関わっていることを示している。

金剛福寺の創建については不明であるが、弘法大師が弘仁年間（八一〇～八二四）に嵯峨天皇の勅により開創したと伝えられている。史料上において金剛福寺の名称がみえるのは、応保元年（一一六一）の土佐国幡多郡収納所宛行状案写で、「蹉跎御崎千手観音経供田」等と見え、補陀洛信仰を伝えている。日本の各地域において靈地など、聖地とされる所がみられるようになるのは、一一世紀から一二世紀にかけて時期であり、金剛福寺も当該時期に靈地として知られるようになったと考えられる。当地は修行の場でもあったと考えられ、鎌倉時代に熊野信仰の影響を受けたと思われる、紀伊熊野との関係も深い。

平安時代末に成立した『今昔物語集』には、「今昔、仏ノ道ヲ行ケル僧三人伴ナヒテ 四国ノ辺地ト云ハ伊予、讃岐、阿波、土佐ノ海辺ノ廻也」とみえており、四国の海岸部を廻り歩く修行者がいたことを示している。足摺半島もその重要な一つであったと考えられ、このことを物語る仏教遺跡として、足摺岬の先端部に営まれた伊佐経塚があげられる。平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられる経筒二口が出土しており、岬の先端部が神仏の常住する非日常的な場であったことを示している。一四世紀の金剛福寺の様相については、『とはすがたり』に岬には堂が一つあり、本尊は観音で、坊主もいなく、修行者が行き交っている様子が書かれている。金剛福寺の補陀落渡海説話を伝えるものであるが、金剛福寺の伽藍の様相も伝えてくれている。金剛福寺は、一三世紀から一四世紀に三度の回録に遭い、伽藍や仏像などを焼失し、中央との関係を保ちながら、さらに勧進などでその度再興してきている。本堂の千手観音立像及び両脇侍立像、二十八部衆立像や仏具は、暦応五年（一三三二）頃に金剛福寺が中世寺院として基礎を築き、発展していくことを象徴するものと位置づけられる。これらの造像群と胎内納入品等を見ると、中世の人々が僻遠の地、蹉跎岬の補陀落東門に眼を向け、神仏の世界に祈りを捧げることが信心の証とし、遠い祈りの世界も重要視したことがみてとれる。

（岡本）

参考文献 『高知県地名事典』 日本歴史地名体系第四〇巻昭和五八年一〇月、根井浄「四国の補陀落渡海」『補陀落渡海史』平成一五年三月、佐藤弘夫『靈場の思想』

平成一五年一〇月、衣川仁『神仏と中世人』令和元年一二月